

七五周年記念資料集編纂に当たって

『文書は語る・資料は生き続ける』

藤田のぼる

一
児童文学者協会の基本的な文書を一冊にまとめた「資料集」を作らなければと思いつたのは、会創立六〇周年の時だから、もう十五年前ということになる。これまで協会では、オフィシャルな「年史」を二回作っている。最初は創立三〇周年の『児童文学の戦後史』（東京書籍）で、一九七八年刊。三〇周年は七六年だから二年遅れたことになるが、全体で四八八ページ、二年遅れにふさわしい（？）質と量を備えた本格的な年史だった。全体が三編と付録に分かれ、第一編が「戦後児童文学の動向と課題」ということで、協会の三十年だけでなく、戦後の児童文学の流れをジャンル別に総括している。総論がこの本全体の編集責任者でもある関英雄で、ジャンル別の書き手は、絵本が森久保仙太郎、童話・小説が古田足日、童謡・少年詩が藤田圭雄など、それぞれのジャンルを代表する顔ぶれが並んでいる。この部分が全体の三分の一強のページ数で、むしろ第二編

の「現代児童文学年表——日本児童文学者協会の三十年の歩み——」（以下、「年表」と第三編『日本児童文学』総目次」という資料的な部分が多くスペースを占めている。中でも第二編の「年表」は一四四ページにわたっているから、一年あたり四ページ近くあることになる。この詳細な年表は、会報や機関誌が参照されたことは当然だが、会報やニュースなどは必ずしもきちんと保管されておらず、また機関誌も創立からしばらくの間は不定期刊行だったから、これだけでは到底きちんとした年表にはならなかったはずだ。それを埋めたのが初代の事務局長の関英雄の日記だった。今神奈川近代文学館にあるはずのその実物を、残念ながら僕はまだ目に見していないが、関日記の綿密さ、彼の記憶の正確さには定評があって、昔のことなら、「いつ、どこで、誰が、どんなことをしたか」など、関さんに聞けばたちどころにわかる、というのは、あたかも都市伝説のようですらあった。それがあっての「年表」だったわけだ。